



一貫コース通信

風が吹くと桶屋が儲かる

今年も師走を迎えてしまった。ボソッと自分に言い聞かせる様に、ふと、呟いた。

毎年の事とは言え私には12月は自省の月である。どうも達成された物事より圧倒的に反省や悔いが多い。あれも駄目、これも中途半端…と言う事ばかりが気になってしまう。もっとも、若年ではないので、年頭に大それた抱負を掲げている訳ではない。しかし、生きている限りは少しでも前に進みたい気持ちは失っていないので、うまく行かない事の多くは、自分にその原因があるのではないかと、つい考えてしまうのだ。“風が吹くと桶屋が儲かる”の論理の如く、何かにつけ、つき詰まる所自分に行き着いてしまうのである。

ところで、風が吹くと桶屋が…の説明は省かせて戴くが、洋の東西の別なく物事の本質に迫る術として論理は重んじられて来た。何時・何処で思考に論理が付加されたのか定かでないが、自然哲学の学びを介しこの辺では…?と教わった。古代ギリシャの小アジア(イオニア地方・現在のトルコ)で自然を相手に“万物の根源は何々である”の論理を唱えた学派が生まれた事を。ちなみにデモクリトスの原子論は、私が学んだ化学そのモノだし、飛んでいる矢は、瞬間的には空間に静止している…のゼノンの論理は、数学の微分そのモノだと思った。また、転じてデカルトの難題は細分化して捉えよ…に繋がると考えたのである。この思考は高校生の私を捉え、以来、事物の原因と結果の因果律に興味を持つ様になった。この事は科学(science)を学ぶには都合が良く、学生時代は勉強が楽しかった。また、当時は、人文社会も唯物史観なる発想が主流で、そう解釈すれば良いの…ネ!のノリで、理解したつもりでいた。論理さえ成立すれば、それが正解なのだと思信して居たのである。後に事象はそう単純でない事を理解するが、思えば、恥ずかしながら若気の至り…で在る。

弛みなく変化し流動する事象(社会・経済・政治・人間関係…etc)と、自分との関係をどう捉えるかは人それぞれである。例えば、ロシアのウクライナ侵攻や、COP27の決議と、自分との関係等で在るが、100人居れば100通りの考えがあるだろう。強い結びつきを痛みとして認識する人も居れば、全く自分には無関係と考える人も必ず一定数居るはずだ。ただ、自分は困らないとの論理で合理化出来る人が居るのだ。私は、様々な所での社会混乱の一因をここに見て居る。また、どうして、社会の事象と自分は無関係と思えるのだろうか考えてしまう。

昨今、分断と言う語が頻繁に使われる様になった。本来、人は社会的動物で一人では生きて行けない。この事からも、人は本質的には分断とは逆の関係を創りたいと願う筈だ。しかし、分断が事実なら、それは社会自体が正気を失って居るに違いない。思うに、ヒトがヒトを気に掛け、困って居るのを見たら手を差し伸べるのは自然な事だ。また、悲しみに打ちひしがれ、茫然自失に陥っているヒトを見たら助けるのが当たり前だ。これは理屈や論理ではない。

では何故改まらないのか? 元々、風と桶屋は、一見何等関係性など認められない。しかし、全く関係が無いと思われる事柄にも、捉え様によっては論理的关系性が認められる事実の在る事を教えている。私には、このマインドが、今、求められている様に思えてならない。